

方方の近作に見る中国社会

瀬 邊 啓 子

〔抄 録〕

方方の中編小説集『涂自強的個人悲傷』(2015)に収められた5作品を通して、方方の2010年から2014年の創作を概観した。

これらの作品では辛亥革命(武昌蜂起)100年を記念した「民的1911」を除き、中国社会の変化によって生じた問題をアイロニーを持って抉り出している。方方は暮らしが変われば、人も変わることを至極当然のこととし、変わらぬ人と変わった人を通して、中国社会の変化と変わることの是非を問うているのである。

キーワード 方方、中国社会、武漢、大学、変化

1. はじめに

2015年1月、人民文学出版社から方方の中篇小説系列として作品集が出版された。その中の1冊である『涂自強的個人悲傷』に収められた作品はいずれも2010年以降に発表された中篇小説となっている。

表題作である「涂自強的個人悲傷」(『十月』2013年第2期)は、方方の作品集の表題としてもよく用いられており、方方自身が最近の「代表作」と位置付けている作品と見ることができる。この作品集には、「刀鋒上的螞蟻」(『中國作家』2010年第5期)、「民的1911」(『上海文學』2011年第7期)、「声音低回」(『北京文學』2012年第1期)、「涂自強的個人悲傷」,「惟妙惟肖的愛情」(『花城』2014年第2期)の5作品が収録されている。

「民的1911」は辛亥革命(武昌蜂起)100年を記念した作品で、『辛亥武昌首義史』(賀覚非・馮天瑜、武漢大学出版社、2006)を下地に、児童向けアニメーション映画(魯藝監督)に改編されることを目的にして創作された小説であることから、他4作品とは性格が異なっている。そのほか4作品に共通するのは中国社会が大きく変化したことによる価値観の相違やジェネレーションギャップを通して、中国社会の「現在」の価値観をシニカルに描き出していることである。

方方は「惟妙惟肖の愛情」以降も、「雲淡風輕」（『長江文藝』2015年第12期）、「軟埋」（『人民文學』2016年第2期）、「天藍」（『小説月報・原創版』2016年第6期）と短篇・長篇を立て続けに作品を発表している。特に長篇小説「軟埋」（単行本は人民文學出版社より2016年8月に出版）は方方が名誉棄損で訴えられた裁判中に発表されたこともあり、話題となった。そのことは『北京晩報』に掲載された「輸了官司贏了人氣〔裁判には負けたが、人氣を勝ち取った〕」（2015.11.6）という記事に象徴されている。

この裁判は2014年の魯迅文學賞の審査中に方方が微博にて湖北の詩人柳忠秧に対して“四處活動，搞定評委〔方々に働きかけて、審査委員をまるめこむ〕”と批判をしたことに端を発するが、この裁判のころの創作に関しては別途触れることとし、本論では扱わない。

本論では、『涂自強的個人悲傷』（人民文學出版社、2015）に収録された、2010年～14年までの中篇小説を中心に、方方の近作について分析を行ってゆく。

2. 方方の近作中篇小説——2010年～14年

2.1 「刀鋒上的螞蟻」

本作の舞台はドイツはミュンヘン、湖南省廬山を舞台としており、『涂自強的個人悲傷』収録作品では唯一武漢が舞台となっていない。作中でも武漢はほとんど描かれることはないが、通訳を務めた青年李亦簡が漢口出身であるなど、武漢とは無縁には仕立てられてはいない。主人公の一人ドイツ人のフィッシャーの家族がその昔暮らしていたのも漢口であり、廬山に到る行程も上海、杭州、武漢を通過して廬山に向かっている。それは彼の父親が漢口の美最時洋行（C. Melchers GmbH & Co.）で働いていたからだ。また作中に“他的哥哥姐姐還教他說武漢話。〔兄と姉はさらに彼に武漢弁を教えた〕”（p.5）や“費舍爾使用剛學的武漢話，說了一句“吃飯”。〔フィッシャーは習いたての武漢弁で、ひとこと「ご飯を食べる」と言った〕”（p.5）という形で、武漢の方言についても触れている。

あらすじは簡単に述べると以下ようになる。

ドイツ人のフィッシャーは退職を機に、幼少期を過ごした廬山の別荘区を訪れる。そこで画家・魯昌南に出会い、フィッシャーは第二の人生として魯を画家として大成させることに心血を注ぐことにする。魯は父親が国民党の兵士であったことから文革期に迫害され、父親は自殺した。魯も地主のような扱いを受け、牛棚で牛とともに暮らすなど苦勞を強いられた。文革後も模写作品を売るなど細々と画家を続けていたが、画家としては大成することはできなかった。フィッシャーが一人の人生を「変えられる」と、己の実力を示そうとした結果、魯はニューヨークで成功を収める。しかし魯の人生を変えたことにより、魯の周囲にいた人たちを不幸にしたことをフィッシャーは知り、自らの「驕り」に気づく。

本作では、魯に代表される文革を経た世代と李亦簡たち文革を知らない世代とのジェネレー

シヨンギャップや、海外に出た中国人をカリカチュア的に描き出している。それらを変化する側と変化から置いていかれる側の双方から描くことで、中国社会の変化や「世間のしがらみ」が薄れてゆくことがよいことばかりなのだろうかという疑問を投げかけている。

まず印象的なのは、文革に関する以下の記述である。

李亦簡也像聽天書。他對“文革”完全不了解，也不知道成分好和成分差是什麼意思。因為沒人跟他說過這些，也沒有關於這方面的書看。大學上公共歷史課，老師也是含糊其詞，雖然時間并不久遠，但在他所接受的教育中，這段歷史却是一段空白。人們全都緘口不言，似乎這時間裡埋伏着炸藥，一說就會引起驚天爆炸。(p. 20)

[李亦簡は難解な文書を聴いているかのようにだった。彼は「文革」についてまったく分からず、「成分(階級区分)」がよい、「成分」が劣っていることがどんな意味があるのかも分からなかった。というのも誰もそういったことを話してくれることもなければ、そういう分野の本を読んでこなかったからだった。大学で受けた一般教養の歴史の授業では、先生も言葉を濁していた。時間がそう経っているわけではないけれど、彼が受けた教育においては、この期間の歴史は空白だった。人びとはみな口をつぐんで語ろうとはしなかった。それはまるでこの期間にはダイナマイトが敷設されていて、口に出せば重大な爆発が起きてしまうかのようであった。]

このとき李は魯の経歴を耳にし、「成分〔階級〕」の良しあしが人生を左右することを初めて知ったのである。ましてや「成分」が何たるものなのかすら、理解できなかった。そして李は、文革について積極的に知ろうとしない限りは、文革期が歴史的空白期間となってしまっていることに気づく。これは方方たち文革を経てきた世代にとって、若い世代に対して「隔世の感」とでも言うべき感覚を有しているだけでなく、同時に彼らの経た「文革」が歴史として蓋をされ、なかったものにされようとしているという事実を告発している場面でもある。

文革が過去のものになってゆくことは歓迎すべきことではあるのであろうが、文革を経てきた世代にとって、言語面だけではなく、価値観を含め、あらゆる面が変化し、文革期以降に生まれた世代とは大きなギャップが存在する。それを若い世代は学ぶことはもとより、知ろうとさえしてこなかったのだから、方方たち文革を経た世代からすると複雑であろう。

次に魯がドイツに初めて行く場面を見てみよう。

魯が出国するとなると、魯の妻を筆頭に周囲の態度が変わる。荷物は画材や作品だけではなく、妻と妹魯昌玉がありとあらゆるものを詰め込む。インスタント麺にシルクと、魯が万一騙されていたときのための用心と言っては、二人が争って詰め込んでゆく。魯の格好は1990年代にはよく見られたスーツ姿であり、「李亦簡指着他衣袖上的商標說，阿姨肯定叫大叔不要把這個名牌商標扯下來吧。〔李亦簡が彼の袖のブランド・マークを指して、おばさんがおじさんに

ブランド・マークをはがしちゃダメって言ったんだろう、と言った]” (p. 32) というように、袖口にはブランドの商標がついたままであった。

フィッシャーの営業が成功し、魯とニューヨークの画廊の専属契約が結ばれ、ドイツからニューヨークに渡るときには、“他身上還是穿着從中國到德國時的名牌西裝。只是出發前，他把袖子上上的商標剪掉了。[彼が身に纏っていたのはまだ中国からドイツに渡ったときのブランド・スーツだった。ただ出発前に、袖の商標を切り落としていた。]” (p. 78) と描写されている。中国では1990年代当時、魯の妹が言うように“只有名牌才會把商標縫在袖子上，這是不能扯下的，不然人家就不知道。[ブランドだけがブランド・マークを袖に縫い付けているのよ。これは取っちゃダメよ。そうじゃなきゃ、ほかの人には分からないでしょう。]” (p. 30) という価値観があり、ブランド・スーツであることを周囲に知らしめることをよしとしていた。

だからこそ、田舎である廬山からドイツに出てきた魯のスーツ姿を李が面白がったのである。そして魯自身もニューヨークに旅立つときには、国際化されていない——あか抜けていない格好を捨てさったのだ。

そしてドイツの地に降り立った魯は空港内で痰を吐いてしまう。“魯昌南從小到大都是隨口吐痰的。他生活的地方，無論哪裡，地上都滿是灰塵。一口痰吐下去，立即滾進灰裡，跟灰混為一色。[魯昌南は小さなころから大きくなるまでずっと口任せに痰を吐いてきた。彼が暮らしていたところでは、どこであろうとも、地面はどこもほこりだらけだった。痰を吐いても、すぐさまほこりに紛れ、ほこりと一緒くたになった。]” (p. 33) というように、廬山では所構わず痰を吐いてきた。それを咎める人もなかったこともあり、その行為が海外でどのように見られるのかも「知らなかった」のである。

魯よりも若い世代の李は魯の行為を非難する。“李亦簡說，你可千萬別隨地吐痰啊。德國人非常愛乾淨，隨地吐痰跟隨地大小便一樣被人痛恨。[李亦簡は、所構わず絶対に痰を吐かないで、ドイツ人は清潔なのが好きなんだよ、みだりに痰を吐くことは所構わず大小便をするのと同じくらい嫌がられることなんだ、と言った。]” (p. 33) このように李は魯の行為を注意する。実際、フィッシャーは何も言わずに、魯の吐いた痰をティッシュでふき取り、そのティッシュをごみ箱に捨ててしまう。魯にとって、その光景は衝撃的なものであった。

これらは1990年代後半の情景として描かれており、スーツのくんだりでは当時の習慣をユーモアを込めて書いているのに対し、続く痰のくんだりでは予備知識なしに海外へ行く中国人をシニカルに描いている。つまりこれらの場面は海外に出た中国人をカリカチュア的に描いた場面でもある。海外に出る中国人が増えたからこそ、魯を通して「中国式」がまかり通らないことを示し、異文化を理解することの重要性を示唆しているのである。

本作では魯はフィッシャーの意図が分からず、フィッシャーが自分の作品を狙っているのでは、などと邪推する。フィッシャーは必要最低限の支援は行うが、魯を保護しようとはしない。李はこれをドイツ人の合理性として説明するものの、魯にはフィッシャーがフィッシャー自身

の能力を示すために魯を売り込もうとしているということは理解ができない。

しかし魯も次第に海外生活に慣れ、中国には帰りたくないと願うようになる。そして成功するにつれ、故郷のしがらみを断つようになる。彼が海外に発つために、あれこれと準備をしてくれ、これまでも献身的に彼を支えて来た妹すらも一顧だにしなくなるのである。

魯は出身階級の影響でまともな結婚ができず、妻とも「愛」による結婚ではなかった。文革後に南昌に戻ると、すでに40歳を過ぎていた魯は妹の紹介で結婚した。魯には中学で代理授業をすることと、模写作品を売ることのでられる収入しかなく、看護師である妻が一年のうち半分を夜勤するなどして、家計を支えていた。作品の冒頭部では、このような状況に耐えかねた妻が半月前に離婚を申し出ていたことが書かれている。

人間とは勝手なもので、魯がフィッシャーと出会い、海外に行くとなると、妻は手のひらを返したようになる。魯のほうも海外に出たことで、「愛すること」を考えだす。それは彼の作品を撮影し、かつ購入もした呉の助手として付いてきた40歳手前の女性明娜に「女」を感じた瞬間から始まる。明娜への描写は以下ようになる。

魯昌南先是看到她的高跟鞋，而後看到她的裙子、鏤花的披肩，最後才看到她的臉。這是張神情嫵媚的面孔。眼睛黑亮黑亮，自信而堅定的光芒從裡面透射而出。(中略)魯昌南握着她的手，發現這手竟是柔軟無骨的。他從來沒有觸過這樣柔軟的手，莫名間就心跳不已。(p. 58)

〔魯昌南がまず見たのは彼女のハイヒールであった。それからスカート、柄入りのショール、最後によく彼女の顔を見た。それは美しい顔であった。目は黒く輝き、自信に満ちて、ゆるぎない光が内から溢れていた。(中略)魯昌南は彼女の手を握ると、なんとその手はふわりと柔らかいことに気づいた。彼はこれまでこのような柔らかい手に触れたことがなく、訳も分からずしきりに胸がどきどきした。〕

この部分の表現はハイヒールに始まり、最後に手へと描写が写ってゆくのだが、纏足文化に見られるように、中国ではジェンダーとしての「女」を描写するときハイヒールが象徴的に用いられることが多い。例えば、陳染「與往時乾杯」(『鍾山』1991年第5期)では主人公がまだ大人の「女」として成熟しきっていないことを示すのに“她還沒有高跟鞋〔彼女はまだハイヒールを持っていなかった〕”(陳染『殘痕』經濟日報・陝西旅游出版社、1999、p. 18)という言葉を用いるなど、ハイヒールが「女」を表す記号となっている。そのハイヒールに始まり、顔、その中でもとくに瞳と移り、最後に手の柔らかさ——肉体労働をしていない、女性らしい手へと移動してゆくのである。

魯はその後も明娜の柔らかい手が忘れられず、気になってゆく。そして魯は妹にも妻にも見られない「女」を明娜に感じ、最終的にはニューヨークで彼女と結婚する。つまり長年彼の生活と性生活を支えてきた妻に感謝することなく、自身が成功すると同時に妻を切り捨てたので

ある。その後は、なんだかんだと口実をつけて妹経由で頼みごとをしてきたり、魯の絵を貰おうとする故郷の人たちをも、妹を含めて切り捨ててしまう。そして成功のきっかけをくれたフィッシャーですら切り捨ててしまったのだ。魯はフィッシャーの援助に猜疑心を抱き続け、ニューヨークに渡ったあとは連絡すら取ろうとしなかった。唯一、ニューヨークの魯を訪ねた李ですらも、魯がフィッシャーの真意を理解できないままであることを知り、魯とは二度と関わらないと決心するのであった。

フィッシャーは退職してもなお自分には力があることを示そうと、魯を画家として成功させようとしたことが招いた結果を知るや、魯の人生を変えたことが、気のいい魯昌玉や魯の妻にかえって不幸をもたらすことになったことを悟る。魯の成功はフィッシャーにとっても成功と言え、彼は魯の成功を喜んだ。しかし魯昌玉からニューヨークに渡ったあとの魯と明娜の仕打ちを聴くや、冷水を浴びせられた気持ちになる。そして「人の人生を変えることができる」と思っていた、自身の傲慢さに気づくことになるのだ。

離婚後、魯の妻は乳がんになる。治療費もままならず、孤独の身であった。離婚時にもめたということもあり、魯夫妻は彼女に援助をしようとしなかった。ただ一人魯昌玉だけが彼女を見捨てなかった。この作品では魯昌玉の存在はとても重要である。善良で、典型的な中国の“老百姓〔普通の庶民〕”として描かれる。それだけではなく、彼女は一環して変わらない存在として描かれている。魯の成功は妹の生活を変えることがなくとも、彼女は兄を恨むこともない。

費舍爾跟魯昌玉已經說了再見，走了一段路，卻又突然回轉。魯昌玉目送他們，尚未進屋，見費舍爾轉過來，有些詫異。費舍爾說，魯女士，我想問你一下，魯先生十分富有，卻一點沒有照顧你，我有些意外。而你，難道從來沒有抱怨過他嗎？魯昌玉說，我怎麼可能抱怨哥哥呢？哥哥變了，是因為他的生活變了。我們不變是因為我們的生活沒變。費舍爾說，原來你是這樣想的呀。魯昌玉說，是呀。我是普通人。普通人只能過普通的生活。但如果有一天我的生活改變了，我也一定會變。這都是很正常的呀。人人都逃不過的。（p. 87）

〔フィッシャーは魯昌玉にもう別れを告げていたにも関わらず、少し行ったところで、にわかには引き返した。魯昌玉は彼ら（フィッシャーとその妻）を見送り、まだ家に入らないうちに、フィッシャーが戻ってきたので、訝しく思った。フィッシャーは「魯夫人、お尋ねしたい。わたしには少し意外に感じるのだが、魯くんは十分金持ちになったというのに、ちっともあなたの面倒を見ていない。しかもあなたときたら、お兄さんをこれまで恨んだことがないともいえるのかい？」魯昌玉は「どうして兄さんに恨み言を言うことができるというの？兄さんの暮らしが変わったから、兄さんは変わったのよ。わたしたちが変わらないのは、わたしたちの暮らしが変わっていないからよ。」と言った。フィッシャーは「そんな風に考えていたのか」と言った。魯昌玉は「そうよ。わたしは普通の人間だもの。普通の人間はあり

きたりの暮らしをおくることしかできないのよ。でももしある日わたしの暮らしが変わったとしたら、わたしだってきっと変わるわ。これはとても正常なことよ。どんな人も逃れられないのよ。』(() 内引用者)

方は魯昌玉に上記のように語らせることで、社会や暮らしの変化に伴って人間が変わってゆくのは当たり前であり、中国の社会が変わることで、人々の価値観も変わってゆくことも普遍的なことだと示しているのである。

2. 2 「民的1911」

冒頭部で述べたように、本作は辛亥革命100周年を記念したアニメーション映画用に作成された。そのため、ほかの作品と性格を異にしている。また本作については拙論「方方『民的1911』に見る辛亥革命」(『中国言語文化研究』12号、2012年8月)にて少しだけ分析を行っているので、ここでは詳述しない。

本作品は「民」という少年を庶民の代表に見立て、彼を通し武昌蜂起前夜の様子を描いている。『辛亥武昌首義史』をベースにして、登場人物にテコ入れを行い、実在はしていない民とその父親を武昌蜂起の中心にうまく立ち会わせている。そうすることで民を「民=庶民」として革命に関わらせ、革命が庶民に寄り添うものであったとして描いている。

2. 3 「声音低回」

本作は障がいをもつ家族を抱えてゆくということについて、そして中国社会は金持ちによって動いていること、しかし貧乏人を救うのもまた金持ちなのだということをシニカルに描いた作品である。しかしながら、幕切れがあっけなく、主人公一家の今後とくに弟の決断がどのようになるのかは読者任せとなっている。

まずは本作品で、中心となる家族について紹介しておく。

主人公阿里の母親は、武漢から来た知青であった。母は「上山下郷」先で父と知り合った。父(老巴)はもとは鉄道兵で、怪我により退役したとはいえ、このときは日常生活をおくるにも、仕事をするにも健常者と変わらない普通の男性と言えた。やがて二人は結婚し、子供(阿里)にも恵まれた。そんなときに、母に都市部での仕事が決まる。彼女の希望により一家三人は都市部で生活を始めることになった。ところが都市部に旅立つ希望に満ち溢れた道すがら、事故が起こってしまう。この事故で、老巴は片足を失い、阿里は3歳ほどの知能で止まってしまった。責任を感じた母は、障がいを持つ二人を抱え、さらに下の子供(阿東)を加えた一家四人の生活を必死で支えて来た。それは一つには事故が自分のせいだと思ひ込んだ母の負い目によるものであった。

作品はその母の突然の死から始まる。阿里は母の死が認識できず、ただただ母を追い求める。

そのことからいろいろな騒動が起こってしまい、弟阿東の生活も変化を余儀なくされる。阿東は通っていた大学院は修士課程までとし、博士課程への進学はせずに、仕事を始める。さらには武漢にも発展による変化の波が押し寄せる。それは彼らの住む東亭も例外ではない。本作は阿里が無自覚で巻き起こす騒動と東亭を取り囲む環境の変化を通して、中国社会の変化や社会を動かす原動力の構造というべきものが方方らしい筆致で描かれている。

本作は方方の作品では珍しい、障がい者と知青が登場する。まずは「知識青年（以下、知青）」について見てゆくと、阿里の母親が「武漢知青」となっている。しかし作品のなかでは、夫である老巴と知り合い、結婚前に妊娠したということが触れられるのみで、文革そのものには言及されていない。

この「知青」については、方方作品のなかでは「出門尋死」（『人民文學』2004年第12期）で初めて登場する。そして「声音低回」が二度目となる。拙論「方方の『家』——『出門尋死』に見る家族と武漢——」（『佛教大学文学部論集』第93号、2009年）でも指摘したが、方方には下放経験つまり「上山下郷」運動で農村部や辺境地に行くという経験がない。そのため、方方と同じ世代の作家と比較すると「知青」への言及が少ない。

同じ武漢の作家である池莉は知青の経験があり、早くも1982年には知青を主人公にした「有土地，就會有足跡」（『長江』1982年第3期）を発表している。また全国的に知られるきっかけとなった代表作「煩惱人生」（『上海文學』1987年第8期）では、「知青」にある強い仲間意識にも言及している。その後も、「懷念声名狼藉的日子」（『收穫』2001年第1期）で知青たちが「青春」を謳歌する姿を描くなど、方方と比べると早くから知青に言及している。さらには知青たちの日常や恋愛、「上山下郷」へ参加する心情などが克明に描かれており、方方が言及する知青とは質を異にしている。

池莉（1957年生）作品と比較してみると、方方（1955年生）作品との「知青」の描かれ方の差は明確であり、方方の兄たちが知青であったとは言え、やはり方方にとって知青は実感をともなったものではなかったと言える。一方、池莉は知青の経験の有無による感覚の差、知青経験者たちの共時性ともいえるべき感覚があり、知青特有の仲間意識を明言している。この体験の差が、やはり知青への言及の差と言えるだろう。

作品に障がい者がよく登場すると言えば、莫言作品が想起される。しかし方方の描く阿里はともすれば障がいを持った30歳手前の青年であるということを忘れてしまいそうになる描写のされ方をしており、謂わば「永遠の3歳児」とも言うべき存在である。母親が愛情を持って、よく躰けたことが分かる阿里は、母親の言うことをよく聞き、一定のリズムを持って生活を送っている。

冒頭部はその日常が破られる場面から始まる。阿里の朝は母親の一声から始まるのだが、その母の声はなく、隣人の羅おじさんに起こされる。この日の朝、阿里の母は倒れ、病院に運ばれ、帰らぬ人となったのだ。羅おじさんは熱乾麵屋の細婆と阿里を目前にしなが、母親の心

臓が弱かったことや一日働きづめで心労がたまっていたことなどを話しているのだが、阿里は朝食の熱乾麺を食べることに集中していて、二人の会話には気にも留めない。阿里にとって、母親の声だけが唯一「脳」に届く声であり、その母の言うことだけが絶対であった。彼の世界は母親によってのみ照らされており、母もまた意識を失う間際まで阿里のことを心配していた。

母の死後、阿里は母を求め続けるが、棺桶で眠る母を「起こしてはいけない」と言われ、母親を起こさないよう努力をしていた。平素から母が寝ているところを邪魔してはいけないと言われてきたのも功を奏した。ところが、母の葬儀の日に、阿里は棺のなかの母ではなく“哀楽〔葬送曲〕”に「母親」を見出すのである。阿東も阿里同様に、“哀楽”に母を見出し、母を求め続ける兄のために“哀楽”の録音テープを用意してやるのであった。

弟の阿東は阿里より5歳年下である。小さなころから兄の面倒を一生見なければならぬことは了解しており、「弟」のように兄の面倒を見てきた。阿里も阿東のことが好きで、彼が学校から戻ってくるのを歩道で待っていた。阿東が戻ってくると、“阿里的弟弟回来了！阿里的弟弟回来了！〔阿里的弟が帰ってきた！阿里的弟が帰ってきた！〕” (p. 190) と手を打って歌うのである。中学の時にはそれを嫌がった阿東であったが、阿里には分かってもらえない。そんな兄であったが、阿東は自分が母のように兄を庇護してゆくことを決める。父親は阿東の負担にならないよう、阿里を連れて自殺しようと思っただけなのだが、阿東は阿里とともに生きるという選択肢を取ろうとしていた。

阿東は終始「弟」阿里の母親のようである。母の声を編集して、阿里に阿東の言うことをよく聞くように言い聞かせ、母の代わりを果たそうとする。卒業を待たずに仕事を始めた阿東は、就職の難しさに直面する。学生時代に阿東よりも成績が劣っていた同級生が思い通りの職場を得て満足していることを知り、彼らからは“工作哪裡是靠文憑和本事找到的？〔仕事のどこが卒業証書や能力で探せるのかい〕” (p. 227) とされる始末であった。彼は“他會告訴自己，是的，志氣、文憑和本事，在這個世道，已經是一個用處不大的東西。但他是東亭的阿東。他只有這個，外加一個殘腿的父親和一個智障的哥哥。這就是他的全部背景。在這樣背景下，他必須去奔一個好的未來，為自己，更是為他們。〔彼は自分に言い聞かせた。そうだ、気概や卒業証書、能力は、この社会状況のなかでは、もうあまり使い道があるものではなくなっている。けれども、彼は東亭の阿東で、彼にはこれしかなく、それに加えて足の悪い父親と知能障害の兄がいる。これが彼のすべての背景なのだ。このような背景で、彼はよい未来に向かって行かねばならないのだ。自分のために、さらには彼らのために。〕” (p. 228) とし、広告会社に勤めるようになる。その後、先生からの勧めで公務員を受けることになり、父である老巴も阿東の選択を喜んだのである。

この就職の難しさは、次節で触れる「涂自強的個人悲傷」では一つの大きなテーマになっているので、ここでは詳述しないが、阿東のような背景を持つ都市生活者でもなかなか適当な就職口を見つけることが困難であることが分かる。

ここで阿里が障がいを持つ人物として描かれた意味を探ってみたい。阿里の根本は変わらない。道理も通じない。これがほんとうに3歳児という設定であれば、阿里の反応は極めて普通のものとなる。しかし阿里は30歳手前のいい大人である。ところが大人でありながらも、子供と同じ純粋さや何事にも囚われない自由さを持つ。ほかの人間の存在なしには生きられないが、阿里はただ節度正しく日常をおくるのみである。

方方は阿里に障がいがあることを示す場面で、以下のような表現を用いている。

阿里見到陌生人，總是先打招呼。阿里說：“我叫阿里。”

看到他的人便都說：“喲，是個苕咧。”

阿里會回答說：“姆媽講的，我不是苕。我是弱智。”

人們便都笑。且說對對對，不是苕。是弱智。 (p. 187)

〔阿里は見知らぬ人に会うと、いつも先に挨拶をして、「ぼくは阿里」と言う。

彼を目にした人はみなすぐに「おや、おバカさんだね」と言う。

阿里はそれに答えて、「母ちゃんが言ったよ。ぼくはおバカさんじゃなくて、知恵遅れ（高次脳機能障害）なんだよ」と言う。

みな笑って、そうだな、そうだな、おバカさんじゃなくて、知恵遅れだな、と言った。〕（（ ）内、引用者）

“苕”は武漢弁で、普通話の“傻”や“傻瓜”のことである。この場面からは、中国における障がい者の扱いの変化も見ることができる。それは一方的に排除されてきた存在ではなくなり、一定の理解を受けられるようになったことである。しかし、その一方で社会的な保障は得られておらず、一家は貧しく、母は無理に無理を重ねる結果となった。

この阿里の存在は「変わらない」という意味では、「刀鋒上の螞蟻」の魯昌玉を彷彿とさせる。東亭の住人が開発によって変化を求められることに右往左往するなか、阿里は変わらぬ日常をおくるのだが、それでも阿里の生活も徐々に変化せざるを得なくなる。母が亡くなった当初は、朝起きると母に挨拶するように“哀楽”を聴く。それは決まって母が阿里を起こす時間であった。毎朝大音量で“哀楽”を聴くので、近隣住人はたまりかねて阿里にせめて“哀楽”以外を聴いてほしいと文句を言いだした。阿東はいい解決策を見いだせなかったが、羅四強が父である羅おじさんに車いすを用意したことで問題が解決した。それは羅おじさんが拳法の練習をしに東湖へ行くときに、阿里に羅おじさんにの車いすを押しってもらうというものであった。東湖に着くと、阿里は湖畔で“哀楽”を聴くようになった。阿里は“哀楽”（＝母の声）を聴くと、彼の一日は安寧であった。それは雨の日も同じで、拳法の練習がなくとも羅おじさんは阿里に付き合っって東湖へ出かけた。

母の不在は徐々に阿里の心に影を落としてゆくものの、阿東は自分が母の代わりになること

で、その空白を埋めようとする。その試みは成功したが、迎賓大道という道路が整備されることになり、事態が一変する。この迎賓大道は高速道路となり、東湖が二環の外となったのだ。ある日の朝、阿里は日課の羅おじさんの車いすを押して東湖へ向かったのだが、どうやっても道を渡れなかった。阿里は仕方なく、7時半に家に戻るや、“哀楽”を大音量で流し、東亭の人々を驚かせた。その段になって、東亭の住人たちも東湖方面に行けなくなってしまったことに気づいたのであった。

再び阿里の“哀楽”に悩まされるようになった東亭の住人たちは、田舎へ出向中だった阿東を呼び戻す。母の死から始まる阿里の騒動は、阿東の人生の足を引っ張っているのであるが、阿東はそれを厭わない。この構図は「涂自強的個人悲傷」でより鮮明に描かれているので、この点は後述する。

阿東もこの時高速道路の建設が庶民の生活の便を悪くしていることに気づき、茫然としてしまう。

他不解為何硬要把以前舒適通暢的大道修成這樣，又不解為何在人口如此密集的城市中心修建如此一條快速道路，讓四周百姓出行不便，更是不解大多百姓分明只夠溫飽，出行以自行車為主，為何道路卻只為汽車服務。 (p. 243)

〔彼（阿東）は以前は気持ちよく通行できていた大通りをどうしてこんな風に整備したのか理解できず、また人口がこのように密集している都市の中心部にどうしてこのような高速道路を建設し、周囲の住人が出かけるのに不便をかけるのか理解ができなかった。さらにはほとんどの住人が十分に衣食を満たすだけに、出かけるのにも明らかに自転車の主となっているというのに、どうして道路が車のためにだけサービスをするのか理解ができなかった。〕（ ）内、引用者

上述のように、阿東は「車に乗れる」富裕層のためにのみ、道路建設が行われるという理不尽に納得が行かない。役所でも上述の道路が“官道”と呼ばれて揶揄されていると所長から聞かされるが、所長は阿東を道理の分からぬ「新人」として笑うのみであった。

そして阿東はある社長から夕食をご馳走してもらった折に、社長から時間が節約できるので、“現在の路太好了。[今の道はとてもよい]” (p. 246) と言われ、腹を立てた。

阿東正滿腹心思，聽時不覺有些憤然，說：“這條路，就是為你們開車的富人修的，哪裡替我們窮人出門想過半分！”

老闆莫名其妙，說：“扯到哪裡去了？這跟富人窮人有什麼關係？富人為創造財富節省時間，不為他們服務還為哪個？” (p. 246)

〔阿東はちょうど思うところがたくさんあったので、(その言葉を)聞いたとき、思わずい

ささか腹を立てて言った。「この道は、あなたたち車を運転する金持ちの人たちのために建てられたものであって、ぼくたち貧乏人が出かけることはちっとも考えられていないじゃないか！」

社長は訳も分からず、「何を言っているんだね？このことが金持ち貧乏人と何の関係があるというのかね？金持ちが財を生むために時間を節約するのは、彼らにサービスをするためであって、誰のためだというのだね？」と云った。〕（ ）内、引用者）

そして社長は所長から阿東の抱えている問題を聴くや、自分を迎えに来る車で、毎朝阿里と羅おじさんを東湖に送り届けることで問題を解決してしまうのであった。

そして本作は“那個老闆怎麼說，這個世上的問題，都是富人解決的。窮人則享受這種解決。阿東想，真是屁話。但他也知道，他的心境，卻因了這句屁話而改變。〔あの社長がどのように言おうとも、この世の問題はすべて金持ちが解決するのだ。貧乏人はその解決を享受するのみだ。阿東はほんとうにバカバカしい話だと思った。しかし彼も分かっていたのだ。彼の気持ちも、このバカバカしい話によって変わったのだということ。〕”（p. 247）

このように結論付けることで、方方は現在の中国社会は富裕層が回しているということを描いている。方方作品には「死」が多く登場しているが、この作品では母親の「死」を「死＝終わり」とは描いていない。この点については、後述する。

2. 4 「涂自強的個人悲傷」

まずは本作のあらすじを簡単に紹介すると、以下のようになる。

山村に暮らす涂自強は、父と母と三人暮らし。兄二人、姉一人はいずれも亡くなるか、消息不明となっていた。涂も大学進学が決まり、武漢に出ることになる。山村の人たちは「果ては大臣か」と大騒ぎするが、涂は山村で付き合いの采葉と別れ武漢に行くことに複雑な思いを抱いていた。采葉から詩を送られ、そのなかに書かれた“個人悲傷〔個人的な心の痛み〕”という言葉が涂のなかに残る。

作品は涂が武漢に出る道すがらに始まり、大学、就職そして母を引き取ってからの生活と続くが、涂はその重要な岐路に立つたびに両親に起こる様々なことから、未来をつぶしてゆく。しかし彼自身もまたその選択をよしとして選ぶことで、決して浮かばれない人生を送ることになる。

この作品は何とも居た堪れない気持ちになるのだが、それは純朴な山村出身の青年涂自強がずっと変わらずに純朴であり続けることにある。

涂自強を見ていると、都市部に生まれなかったものは都市の生活を知らぬままのほうが幸せなのではないか、そう思わざるを得ない。山村に暮らす人々は武漢に行くというだけですごい

と感じ、大学に行くというだけで官僚になって一角の人物になれると思っている。一昔前であればそういうこともあったかもしれないが、今はそういう時代ではないことを塗は分かっていた。それでも大学に行って、某かの「成功」は夢見ていたはずだ。

だからこそ彼が山村を出て、武漢に向かう道すがらは希望に満ち溢れていた。車には乗ったことがなかったので車酔いで車に乗り続けられもしない。そこでお金を使わないようにアルバイトをしながら、ゆっくりと進んでゆく。ひょっとすると、この行程が塗にとって人生のピークだったかもしれない。

大学に着いて、必要経費を納めるとき、彼はベルトに縫い付けていたお金を取り出し、彼の汗のしみ込んだ細かいお金を数えていた。そのときの周囲の反応や同情心が塗を大いに傷つけた。

繳費時，他當着眾人的面，解下要帶，從中摺出裡面的零碎，然後一張張一塊塊地數給收費員。大多的錢都被他的汗水濕透。旁邊的人都驚訝地望着他，有幾個女生捂住了鼻子。塗自強先沒在意，數錢時，突然意識到什麼。他抬頭四下望望，看到無數或驚訝的或同情的或鄙夷的目光，心裡突然就膽怯起來。一路走過的信心瞬間消失。(p. 268)

〔納付するとき、彼は衆人の前で、ベルトをはずし、中から細々としたものをほじくり出し、一枚ずつ数えて出納係に渡した。ほとんどのお金が彼の汗で濡れそぼっていた。そばにいた人は驚いて彼を見たが、数名の女子学生は鼻を押さえた。塗自強は最初気にもとめていなかったが、お金を数えているとき、ふいに何かに気づいた。頭を上げて周囲を見ると、無数の驚きや同情、軽蔑の眼差しを目にした。心がにわかに怖気づきだした。道中歩いてやって来たという自信が瞬時に失われた。〕

このように塗は大学に着いた日に、田舎者あるいは貧乏人蔑視とでも言うべき視線に遭い、それまで感じていた充足感を一気に失くすのである。その情景を見た先生から仕事を紹介すると言ってもらえたが、道中のアルバイトなどで学費も全納でき、必要な生活用品も購入できただけでなく、手元には少しはお金が残っていた。しかし先生は約束通り、厨房の仕事を紹介してくれた。それは厨房であれば食べることに事欠かないであろうという配慮でもあった。

こうして塗の大学生活が始まるのだが、彼からしたら五人一間の寮生活は快適このうえなかった。家での生活や高校の寮生活と比べても、“很多年很多年，他都是餓着肚子讀書的。他幾乎不記得自己吃飽過。〔長年、彼はお腹を空かせて勉強をしてきたのだ。彼は自分がお腹いっぱいになったことがあるとは、ほとんど記憶していなかった〕”(p. 271) という塗からは生活レベルも食事の質も申し分ないものであった。厨房の仕事を世話してくれた先生のことを、“老師真俗氣，明擺着看不起我們鄉下來的人。〔先生はほんとうに野暮だ。ぼくたち田舎から来た人間を馬鹿にしていることは明らかだよ。〕”(p. 270) というルームメイトはいたが、塗

からすれば、そんなことを言うルームメイトは“郷下〔田舎〕”といっても塗よりも経済的には恵まれていることは明らかだった。

学問にも熱心に取り組み、厨房のアルバイトで生計を立てつつも、塗の生活は徐々に都市化してゆく。しかし厨房の給料は安く、パソコン一つ買うこともできずにいた。厨房では塗と同じように山村からやってきた女子学生と知り合い、採薬のことを思うと“悲傷〔心が痛む〕”を覚えたが、同じ境遇ということもあり、徐々に彼女と親しくなる。また彼女からは家庭教師のアルバイトの存在を教えられ、高校二年生を教えるようになる。

この山村出身の彼女と黄鶴樓へ行くという場面は身につまされる。

大年初三那天，他與中文系女生相約一起去黃鶴樓。在鄉下，他們對武漢的唯一認知就是這黃鶴樓。那是課本上讀來的。課本以外的書籍，他們基本都讀不到。（p. 278）

〔旧正月3日の日、彼は中国文学科の女子学生と黄鶴樓と一緒に行く約束をしていた。田舎では、武漢で唯一認識されているのが黄鶴樓であった。それは教科書で読んだものだった。というのも教科書以外の書籍は、基本的に読むことができなかったからだ。〕

一大早，兩人便搭着公共汽車到黃鶴樓。兩個人的汽車票，幾乎去掉一頓飯錢，但塗自強還是毫不猶豫地買了。男人為女人花錢，他想這也是天經地義。可站在黃鶴樓售票處時，塗自強方知這份天經地義太沉重。買票一人要八十元。塗自強瞬間呆掉，同行的女生也瞬間呆掉。他們都知生活的艱難。塗自強猶豫着，後面排隊的人便喊，買不買呀？售票窗口裡面也冒出不耐煩的聲音：到底買不買？（p. 278）

〔早朝、二人はバスに乗って黄鶴樓へ向かった。二人のバス代は一回の食費を失うに等しかっただけでも、塗自強は少しも迷うことなく購入した。男が女のためにお金を払うことは、ごく当たり前のことだと思っていたからだ。しかし黄鶴樓の入場券売り場に立ったとき、塗自強はこのごく当たり前のことがとても重たいことだとまさに知ったのだった。入場券は一人80元かかる。塗自強は瞬時に茫然とし、同行していた女子学生も瞬時に茫然となった。彼らはどちらも生活の苦しさが分かっていた。塗自強は躊躇した。すると後ろに並んでいた人が、買わないのか、と叫んだ。入場券売り場の窓口の中からも面倒そうな声が、結局買うの買わないの、と飛んできた。〕

黄鶴樓の入場券は2015年も80元であった。決して安いものではないが、ふつうは「せっかく来たのだから」と購入するだろう。しかし塗自強は女子学生に促され、チケットを購入することを断念する。この日はお金のかからない長江大橋を見学して終わるのだが、女子学生はほとんどなくして車を所有する男性と仲良くなり、厨房の仕事もすぐに辞めてしまった。

塗は二人で160元のチケット代を支払う勇気が持てず、女子学生との関係は終わってしまっ

た。一方、女子学生は裕福な男性を捕まえて、生活苦から抜け出していった。彼女からはお互いに“経済実力〔経済的な力〕”(p. 280)のある人を探そうと言われるが、塗は彼女のことを好きになるかどうかという時点で、女性からの愛を得ることの難しさを突き付けられた形となる。「惟妙惟肖の愛情」にも、都市部に残るための手段などで愛のない結婚を選ぶ女性の姿は描かれているが、「塗自強的個人悲傷」では塗のような条件の男性についてきてくれる女性は存在せず、「愛」を語り合うことすら難しかった。

塗のなかでは、いつまでも采葉の存在が残るものの、彼女も県城で結婚生活を送っていた。しかし“她過得並不幸福。想罷，自己也有滿心的不幸福感，只想找一處地方，哭出聲來。他們的脚果然走的是全然不同的路，但他們的不幸福卻是相同的。〔彼女は決して幸福には過ごしていなかった。考えてみると、自分も不幸な感覚でいっぱいであった。どこか場所を探して、ただ声を出して泣きたかった。彼らが歩いていたのはまったく違う道だった。しかし彼らの不幸はなんと同じものであった。〕”(p. 316)のであった。

ルームメイトの馬は都市部での成功を得るのに、“如果找個家裡有背景的女人當老婆，莫名其妙就能省下至少二十年時間。〔バックのある女性を見つけて、奥さんにできたら、不思議なことに少なくとも20年の時間を省くことができる〕”(p. 285)と言う。馬は女性にもてたが、彼にとっては「頼れる背景」を持つ女性こそが必要であり、“天仙樣的女人〔仙女のような女性〕”(p. 286)であっても幸福な日々はおくれしないとす。これを聴いた塗は複雑な思いをするのだった。

本作では、上述のように田舎出身の若者たちの恋愛・結婚の不自由さが描かれている。塗の立場は「愛のない」恋愛には割り切れず、自分の環境では女性とも付き合えないというもので、中国学科の女子学生や馬のようにうまく立ち回ることができなかった。“塗自強想，他眼下根本給不了任何一個女人幸福。他唯有豁出命去打拚，才可能扭轉自己的局面。這是沒有辦法的事情。沒有女人就沒有吧，這是天定的命運。〔塗自強はこのように思っていた。目下のところ、いかなる女性にも幸福を与えることはまったくもってできない。ただ命がけて頑張れば、自分の状況を逆転できるかもしれない。これは仕方がないことだ。女がいなければ、それまでだ。これは天が定めた運命なのだから。〕”(p. 320)とし、自分に与えられた「運命」としてあきらめて受け入れるのみである。

塗は作中の都市生活者および読者の目には「不運な人」と映るが、本人は「運に恵まれている」と感じている。例えば、ルームメイトからパソコンや携帯電話を無償で譲り受けたときも、“他覺得同學們對他真是太好了。他窮他没錢這是他的命運，也是他没辦法的事。但他走出那個窮苦的山村，遇到了這麼多好人，卻真的是他的運氣。〔彼は同級生たちがあまりにもよくしてくれると感じていた。彼が貧しくお金がないことは彼の運命の巡りあわせだったが、彼にはどうしようもないことでもあった。しかしあの貧しく苦しい山村を出て、こんなによい人に巡り会ったことは、まことに彼の運だった。〕”(p. 282)とする。その実、同級生からはノートパ

ソコンに変えるのでデスクトップが邪魔になった、携帯電話を新機種にするので塗にあげたという程度にすぎなかった。この塗の感覚は魯迅「阿Q正伝」（1921,22）の「精神勝利法」とは別種のものではあるが、すべてをプラスの幸運と捉えることで、自分の不幸を中和しているように思える。その点では「精神的幸運法」とでも言うべき思考方法と言えるだろう。

作品のなかでは、塗の不運は巡り続ける。よい就職につながるようと大学院進学を目指した塗は目標を見つけ、一所懸念だった。しかし大学院受験のそのときになると、村長から父の危篤の電話をもらい、都市での成功に繋がる可能性になった大学院受験を放棄して家に帰る。途中、大学進学後一度も帰省しなかったことをしきりに後悔していた。長距離バスで県城に着いたときには、県の病院へ行くと言われる。病院に駆けつけた時にはもう父は亡くなっていた。そして父の死の一因が、両親が塗が帰省しやすくなると楽しみにしていた道路建設にあり、その建設にあたり墓の移動を命じられたことにあったことを知る。そしてすべては“命〔運命〕”（p. 229）と、馬から言われるのであった。

塗の不運はこれに終わらない。塗と同窓で、山村出身の経営者が立ち上げた広告会社で電話マーケティングの仕事が見つけれられたのだが、700円の月給に出来高で貰える給料は十分ではなく、部屋を三人で借りていても苦しい状況であった。塗は何とかやりくりして、母に50元ずつの仕送りもしていた。その年の春節には5,000元強のボーナスが手に入る予定であったが、そのタイミングで経営者が姿をくらまし、ボーナスは水の泡と化してしまう。そのときに会社のメンバーと食事に行き、そのレストランが繁盛していて忙しそうだったので、レストランを手伝うことにする。たったひと月だけではあったが、1,200元になる仕事であった。大学の四年間を厨房で働いていたこともあり、彼の仕事ぶりは歓迎された。塗の気がかりは田舎で一人旧正月を過ごす母のことだけであった。しかし今度は大雪で、ぼろぼろの実家が倒壊し、母が生き埋めになったものの幸いなことに足の怪我だけですんだという知らせが入った。その電話が入ったときは、広告会社の面接試験中ではあったが、塗はすぐさま鎮の病院に駆け付けた。そして母を武漢に連れて行く決心をするのである。

このように塗の人生は道が開けそうになると、某かの不運に遭遇し、いつまでたっても社会の最下層の暮らしから抜け出せない。これ以降も運が巡ってくるや、母に何かが起こり、結局塗は浮かばれないままになる。しかし母親のほうは息子と武漢に出ることが「福」と喜んだように、都市の生活には馴染めないものの、菩薩信仰に出会うことでどンドン生き活きとしてゆく。

塗の不幸は末期の肺がんと診断され、死を迎えることを覚悟した段階で終わりを告げる。彼は健康診断すら受けないまま、必死になって働いてきた。それでも治療費を捻出することもできなかった。彼の懸念は最後まで一人残される母にあった。塗は彼女が手伝いに出入りしていた蓮溪寺にて余生を過ごせるように頼んだうえで、母にはアメリカへ派遣されると偽り、一人大学入学時にたどった道をゆっくりと戻ってゆくのであった。

彼は猫のように人知れず人生の幕を閉じたのだらうが、彼の死は直接描かれることはない。ただ彼の人生のピークとも言える大学へ向かう道を遡ることで彼の「生」を思わせる。塗の人生とは何だったのだらうか。作中では、山村に生まれた者の“命〔運命〕”という描写が多く登場するが、塗は静かにその定めとも言える運命を受け入れて生きるのみであった。

貧富の差、田舎と都市の生活レベルの差、それに加え都市に「地場」を持たない者の不幸、その根本的原因はどこにあるのだらうか。方は根源がどこにあるのかは描いていないが、農村や山村に住まう人々が都市を目指すことがそれほど幸福なことではないということを示している。そして同時に、都市で「上手く」生き抜くことの難しさも描いているため、塗のように何も持たざる者の「不幸」がより鮮明になる。しかも塗自身はその不幸の根源が何かには気づかない。もし塗が自分勝手に生きる道を選び、個人の幸せのみを追求していたら、おそらく違う結果になっていただらう。彼は家族、とくに母を重荷とは感じないまま、背負い続けた。それは「声音低回」の阿東が無私で阿里を庇護し続けた場合の結果にも近いのではないだらうか。

塗は家庭教師先の父親から“武漢の大學生太多，走到街道口，滿街都是他們。我們招人學歷至少是研究生。你一個本科，又不是武大華科的，不容易找事呀。〔武漢の大学生は多すぎる。通りを行けば、どこもみな大学生だ。我々の求人者の学歴は少なくとも大学院生だ。君のような本科生で、武漢大学でも華中科技大学でもない者は、職を得るのは簡単ではない。〕”(p. 286)と言われる。武漢への道すがら、塗は「大学」に行けば道が開けると期待していたはずだ。しかし現実には名門大学でもなければ、就職すらままならず、一定以上のレベルの生活を送ることすら難しいものであると知らされる。塗は生活は都市に順応し、山村に戻ってももはやその生活に馴染めなかった。それでも彼の本質は親思いの山村の一青年であり続けた。その変わらぬことが、彼を“悲傷”に彩られた生に導いたのである。

2. 3でも触れたが、方方作品には「死」が多く登場する。その多くは「救い」が用意されているわけではない。本作でも塗の死には「救い」が用意されているわけではない。しかし塗の母親は「信仰」によって救われる。「死」そのものへの救いではないが、「奔跑的火光」(『收穫』2001年第5期)に描かれたように出口のない女性の運命の過酷さから夫殺しに至るという描写でもない。「信仰」については、漢劇について描いた「水随天去」(『當代』2003年第1期)にも描かれており、精神的な安定にもつながっている。特に塗の母親は都市に出たものの、都市の感覚や生活に馴染めず、田舎者として馬鹿にされ続けた。死にたいと思っていた矢先、蓮溪寺の尼さんに救われた。そこで出会った菩薩信仰により、彼女は救われただけでなく一変する。塗が弱っていくのに比して、信仰を得た母は“每每從那裡回來，臉上都有光。〔あそこから戻ってくるたび、顔は光り輝いていた〕”(p. 336)のである。このように、方方が「死」への一つの救いとして「信仰」を描いたことは、これまでの救いようのない「死」の描写とは大きく異なっているのである。

2. 5 「惟妙惟肖的愛情」

本作は、短編小説「禾呈」（『小説林』1993年第1期）の続きとなる作品である。「禾呈」は「程」の字を分解したもので、方方の知っている程という大学教授の名前を分解し、作品タイトルにしている（「引子」p.347、参照）。この作品は「言午」（『鴨緑江』1991年第8期）、「金中」（『芳草』1992年第8期）という二作とシリーズとなっている。このシリーズは、大学や研究所の研究者たちが文革後の時代の変化のなかで、どのように暮らしていくのかをアイロニーを持って描いたものである。

「禾呈」は「惟妙惟肖的愛情」のダイジェストのようで、あっさりとしたストーリーとなっており、「惟妙惟肖的愛情」は「禾呈」の後日譚がメインとなった作品である。二章に入ると、“這十幾年，世界變化之劇烈，令日常生活也成傳奇。現在我要把它續上來。〔この十数年、世界の変化の激しさが日常生活をも伝奇にってしまった。今わたしはこれを続けよう。〕”（p.360）として、「禾呈」の後日譚を示している。

ここであらすじを簡単に見ておくと、以下のようなになる。

禾呈は大学に残り、歴史系の教員となる。大卒の妻は「教授夫人」になるという夢を持っており、そのため禾と結婚する。二人は唯妙・唯肖という双子を授かり、唯妙は父と同じく大学院にまで進学し、歴史系の教員となる。一方、唯肖は高卒であったが、親戚の雪青の運転手をするようになると、彼女の経済的な成功とともに裕福な生活を送るようになる。双子の生活を描いてゆくなかで、中国社会の変化による「大学生」「博士」「大学教授」の地位の変化と、学歴はなくともお金があればすべてを動かせるという時代を端的に表している。

「禾呈」も「惟妙惟肖的愛情」も文革を挟んで、物の価値観が変わってゆく様子を禾の一家を取り囲む状況の変化から描いている。そのなかでも「大学」の変化が顕著に描かれ、大学も経営のために社会的地位のある者に学位を与えるようになっていたり、唯肖が論文を「書いてもらい」学位を「買う」ということも皮肉を持って描いているが、禾のように大学の変化について行けない者を悲哀を持って描いている。

それはすでに「金中」に描かれていた。金中は才能のある研究者であった。30年前に発表できていれば評価されたであろう研究は、政治運動の影響で執筆も出版もできないままであった。その研究について、30年かけて震える手で書き上げたのである。しかし時は残酷で、30年前には優れた内容でも、30年後には観点が古くなっており、出版ができない内容となっていた。その原稿を預かった出版社勤務の金中の学生は金中にその事実を告げられず、いろいろな理由をつけて出版を先延ばしにした。

その金中に近いものが禾にもある。ただし金中は才能ある学者であったが、禾は平凡であった。ただ大学に残り、魏晋南北朝について講義するのみである。大学に残れたのも、妻のおじが教授夫人になりたいという姪のために口を利いたからであり、“像禾呈這樣成份不硬、學業又一般的人總是只能去人人都想不到的地方。〔禾程のように身分階級がよくなく、学業も普通

の人はいつも人々が行きたくないところへ行くことしかできなかった。)”(p. 352) ので禾は喜んだ。禾が文革後幹部学校から戻った時には順調に講師になることができた。しかし副教授(准教授)に上がろうとする時には時局が変わっていて、何某かの「専著」がなければ昇進できなくなっていた。そこで著書を出すために、5ヵ月と7日をかけ、『魏晋風雲』というタイトルの著作を仕上げたものの出版には出版権を購入せねばならないと雪青に指南される。ようやく3,000元を準備したものの、出版権はすでに5,000元になっていた。冷蔵庫などいくつかの電化製品を売り、何とか出版にこじつけたのだが、自宅に置かれた数百冊の著書にはナメクジが這うだけで、その著書も何物にもならないという状態であった。こうして何とか副教授になった禾であった。それでも最後は妻の機転で退職前に何とか教授にもなり、大学で新しく建てられていた宿舎にも部屋を確保し、ゆったりと暮らせるようになる。

一方、いとこの雪青は大学にこそ受からなかったものの、機を見るに敏というところがあり、政治闘争の時期であれば批判原稿を書き、その後は社説や理論などを書き、指導者たちに重用される。多少の風雨はあるものの、改革開放後は企業家として成功する。このように雪青は禾と対極の存在で、大学へは行けなかったものの時局に乗って活躍する器量があった。禾の妻も雪青がつねに自分たちよりもよい暮らしをしていることが不思議でならなかった。

本作では禾と雪青、唯妙と唯肖と二つの世代における対極的な生き方を描いているのだが、唯妙のほうは禾に比べても柔軟性がある。ここで双子の人生の差を見ておくと、以下の表のようになる。

	唯妙	唯肖
学歴	博士(歴史系)	高卒→5万元で論文を購入し、北京大学の博士に
就職	大学	車の運転手→雪青の専属運転手→雪青の会社を手伝うようになる
結婚	田舎に残りたくないという女性と結婚 ※妻の思いのままに →離婚	唯妙に紹介された馬教授(父の同僚)の親戚馬小珍と最初の結婚 ※女性が唯肖に乗り換えた 裕福になり芸能人と交際 →離婚
	父から評価	母から評価

ただし本作のタイトルになっているように、大学という空間の変化ということだけではなく、唯妙・唯肖二人の結婚についても描かれている。

唯肖のほうは、馬小珍という女性と結婚して一児をもうけるが、結局夫婦関係は破たんする。そもそも馬は馬教授が唯妙の嫁にと考えて唯妙に紹介した女性であった。しかし彼女は実を取るタイプで、さっさと唯肖に乗り換え、唯肖が芸能人と浮気をする、財産をしつかりと貰っ

て、悠々自適な生活を謳歌する。この馬の結婚の目的は田舎には戻りたくないというものであり、あくまでも結婚は都市部に残るための手段でしかなかった。

一方、唯妙は馬小珍に振られても気にも留めない。馬と同様に、田舎には戻りたくないという女性と、彼女の目的を分かったうえで結婚をし、やはり一児をもうける。唯妙は妻のことを愛していたわけではないが、彼女の目的に協力できただけでよかったのである。しかし女性のほうは唯妙の無関心に耐えられなくなり、結局彼の結婚生活も破たんする。

このように双子の人生は違うようで、同じ結末を迎えることになるのだ。しかしながら、この作品の主要人物は恋愛感情よりも目的のために手段を選ばないというところがある。独り身の雪青はともかく、禾の妻も継父により処女を奪われていたため禾のような平凡でもてない男を選べば、拒否をされない。それどころか「教授夫人」になる夢を叶えられるかもという打算によって禾を選んだのである。禾のほうも妻が処女ではないことに失望を覚えたものの、このチャンスを逃すと結婚できないかもという思いと、体を重ねたことで「女」のよさを実感したこともあり、妥協する。唯妙のほうは女性の「感情」にはお構いなしで、馬小珍が唯妙・唯肖を秤にかけているときにも彼女に対して無関心であった。結果、馬はさっさと唯肖に乗り換えることを選ぶのである。唯肖は浮気相手であった芸能人と結婚することになるが、雪青はこれを“前途無量〔前途は計り知れない〕”（p. 405）と表現し、芸能人の結婚が唯肖の企業家としての成功と結びつくと、極めて打算的である。

馬の離婚については、禾夫婦や馬教授夫婦の世代には理解ができないものであった。社会は変わり、感覚も変わった。方方は“伝奇”（p. 360）と表現するが、中国社会の急激な変化のなかで本作をその変化に翻弄されている人々の物語と見たとき、これは伝奇というよりは普遍的な物語と言える。雪青が青年教授に不満をこぼす馬教授に“你們這些教授呀，一輩子都不肯變。這世道是變化的，〔あなたたち教授ったら、一生変わろうとしないのね。この世は変わっているのよ〕”（p. 391）と言うように、時代に乗って変わる人と、時代に乗り切れない人がいるのだ。それは前者が雪青や唯肖のような人物であり、後者は禾呈や唯妙のような人物であり、後者の二人は前者の割を食っているように思われる。後者の二人が持つはずのアドバンテージであるはずの「学歴」ですら、禾は雪青が大学から請われて博士指導の資格を得たことに複雑な思いを抱き、唯妙も学生から弟の唯肖が北京大学の博士になったが学生自身は修士修了すらままならないことを言われると、“我們現在的生活正在構成未來的歷史，這個你可以寫。〔我々の今の生活は未来の歴史を構成している。それについては君が書けるよ。〕”（p. 407）と、歴史学を研究する唯妙らしく今もまた未来から見れば歴史の一頁にすぎないとするのである。

3. 方方の近作と中国社会

以上が方方『塗自強的個人悲傷』に収録された5作品の簡単な分析である。発表時期に沿っ

で見てゆくと、「民的1911」は異質ではあるものの、相互の作品に関連性があることが分かる。例えば、「声音低回」に都市部において就職活動事情が少し触れられると、「涂自強的個人悲傷」ではより困難な状況の就職事情が明記されており、「涂自強的個人悲傷」において「大学生」というブランドが昔ほどの意味を持たないという現実が触れられると、「惟妙惟肖的愛情」では大学や学位の持つ価値観が変わってゆく様子が描かれるという具合である。

各作品にはまだまだ見るべき点はあるのだが、ここでは以下のいくつかの点について5作品を横断して見ていきたい。便宜上、以下①「刀鋒上的螞蟻」、②「民的1911」、③「声音低回」、④「涂自強的個人悲傷」、⑤「惟妙惟肖的愛情」とし、それぞれの作品を①～⑤の番号で示してゆく。

3. 1 「大学」「大学生」の変化

「桃花燦爛」(『長江文藝』1991年第8期)に見られるように、方方作品では大学生と労働者の「身分差」による悲劇が描かれることがある。この作品からは、「大学生」が「特別」だった時代が窺える。

「母親越走越遠」(『方方影記』河北教育出版社、1998)には、以下のように大学進学が特別であった時代について示されている。

父親活着時曾經說過：我的四個兒女我都要把他們培養讀大學。但是父親僅僅只看到了我的大哥進入清華便先行而去。然後母親便重複這樣的一話題：我一定要實現你爸爸的願望，你們三個都得上大學。(p. 31)

[父が生きていたときには「僕の四人の息子・娘は大学で学べるよう育てたい」と言っていた。ところが父は一番上の兄が清華大学に進学したのを見ただけで、先に逝ってしまった。その後母が「わたしはきっとあなたたち三人を大学に行かせるというお父さんの願いを実現させるわ」という話題を繰り返していた。]

七十年代末、我們居住的劉家廟宿舍，誰都知道母親是個了不起的人，她所教育的兒女全部都是大学生。母親以我們為自豪。(pp. 31, 32)

[70年代末、私たちが暮らしていた劉家廟宿舍では、誰でも母がすごい人だと知っていた。母が教育した息子・娘はみな大学生であったからだ。母はわたしたちを自慢にしていた。]

しかし方方は文革期に荷物の積み下ろし工として働いた経験があり、労働者階級と大学生の双方を経験していた。

方方にとって「大学生」は特別なものであったはずが、社会の変化により特別なものではなくなくなってしまったのだ。④⑤ではそのことが如実に語られている。もちろん①③も大学生は出

てくるが、こちらでは大学生がとりたてて特別なものとして描かれていない。

すでに指摘はしたが、④に描かれた山村の人たちの目に映る「大学生」とは、“村長斬釘截鐵地説，學好了得去縣衙當官！村裡只要有一個人當官，就吃不到虧。朝内有人，一村人都好過。你爹媽我會照應。你呢，將來就照應我們村。〔村長がきっぱりと「学び終えたら、県の役所で役人になれよ！村には役人が一人いさえすれば、損はしないからな。お上に人がいれば、村人は過ごしやすい。お前さんの父ちゃん母ちゃんは、わしに任せておけ。お前さんは、将来わたらの村の面倒を見てくれよ」と言った。〕”（p. 253）という存在であった。そこには「大学に進学＝役人になる道が開けた」という構図が見える。塗は物理を勉強するための進学であって、役人になれないと指摘するのではあるが、村長や村人たちの過大な期待が垣間見える。

四爹爹説，強佶，說是你考取了大學？

涂自強點點頭，說是呀。

四爹爹説，要去漢口？

涂自強説，嗯。不過學校不在漢口，在武昌。

四爹爹便拍著牛背大笑，說好好好，都一樣都一樣。我涂家也出了人才。 （p. 249）

〔四じいさんが言った。強よ、お前さん大学に受かったんだってな。〕

涂自強はうなずいて、そうだよと言った。

四じいさんは、漢口に行くのかね、と言った。

涂自強は、うん、でも学校は漢口じゃなくて、武昌にあるんだよ、と言った。

四じいさんは牛の背をたたいて大笑いし、そうか、そうか、どっちでも同じだよ、同じだよ、わしら涂の家からも人材が出たな、と言ったのだった。〕

このように、漢口に行くということすら、山村の人にとっては「誇り」であり、大学に入学することは一族の誉であった。しかし現実には村人が期待した「果ては大臣」といったものではなく、田舎出身であり、重点大学でもない大学に通っていた塗は就職に一定のハンデがあり、大卒であるメリットはほぼ描かれぬ。また作中には、都市と農村部の金銭感覚の差などが描かれ、都市生活者たちが田舎者を馬鹿にしている様子が窺える。それだけではなく、お金がないことが一種のハンデとして描かれ、塗は就職、男女交際、結婚すべて手にすることができないのである。

上述したように、⑤はまさに大学の変化が如実に描かれている。1990年代に入り、大学の昇進は成果主義となった。講義をし続けていけば、副教授、教授にと順調に昇進してゆくと思っていた禾は、その変化に苦勞する。それどころか、自分が最後まで得られなかった博士課程指導の資格を、大学に行けなかったいとこの雪青があっさりと手にしたのである。彼女は起業で成功し、本をたくさん出版していた。その「成功」により、大学から博士課程研究指導教授の

資格を得るのである。もちろん禾自身が才覚のある人物ではなかったのではあるが、これでは大学でこつこつと研究している研究者が報われなと感じさせる。

それは唯妙と唯肖の対照的な生き方にも見られる。唯妙は父親と同様大学へ進学し、大学院へと進み、そのまま大学に残る。歴史学という“低迷到空前絶後〔未曾有の低迷〕”(p. 407)という学問を志向したということもあり、彼はたった三人の学生を前に講義をしていた。それに対し、金で買った北京大学の博士という肩書と有名芸能人の恋人という話題性から、大学にも通ったことのない唯肖の講義は大ホールで行われるほどの人気を博すのである。そして禾の妻が“難不成真的不讀書比讀書管用了？〔まさか勉強していないほうが勉強しているよりも役に立つとは言わないわよね〕”(p. 408)と発言することで、学問を修めた者たちの地位が学問を修めていない者の下という空気が流れるのである。唯肖は“你們這些研究歷史的人到死都不明白，歷史它就是個戲子，給誰演戲就為誰化裝。這世界只屬於當代，從來都不屬於歷史。〔あんたたち歴史を研究している人間は死んでも分からないさ。歴史ってものは役者ってことをさ。芝居をしてやる人間のためにメイクをする。この世界は当代（今）に属していて、歴史に属したことなんてないのさ〕”(p. 408、() 引用者)と冷笑するのである。歴史という過去を扱う学問ということもあるが、禾呈や唯妙といった学問に生きる人々そのものも社会の変化に順応できず、今という時代を生きられていないというのである。

3. 2 「死」と信仰

「方方の『家』」(佛教大学文学部論集第93号、2009)にて、方方作品における「死」について分析を行っているが、近作における「死」への描写は変質が見られる。

それぞれの作品について見てゆくと、①では「死」については直接的な描写はないが、魯の父親の自殺と魯の別れた妻が乳腺癌に侵され死の床にあることが示唆されている。また古い中国を代表する前妻と妹は、魯の成功の陰で切り捨てられる。ただ善良な妹だけが、死の床にある元妻の世話をするだけである。

②に関しては、革命の犠牲者たちが存在しているため、多くの死が描かれている。

③では、最愛の母の死から物語が始まる。作中では、母の死を認識できない阿里が母を求めるときもあり、葬式までの間は「死」が常に漂っている。また阿里が葬式で、“哀楽（葬送時の哀調の音楽）”に母を見出し、その後の日常のなかにも「死」が描かれている。しかし、それは「死=終わり」ということではなく、死が「生」に寄り添っているのだ。つまり人の死後にも、母が生きていた時の「記憶」が確実に残された人間のなかに息づいているのである。また阿里だけではなく、弟の阿東も“哀楽”のなかに母を見出す。そこから兄弟のなかには、母が生きていた「証」がしっかりと生きていることが分かる。

④では父の死と塗自身の死が描かれる。二人の「死」にはともに治療費を払えないという現実のなかで、「死」を受け入れざるを得ない現実が描かれている。そのなかでも、塗の「死」

には“命（運命）”として受け入れられる、やるせなさが感じられる。しかし母は信仰により「死」から免れることができたのである。信仰が母を生き生きとさせ、塗がひっそり去ったあとでも、母が生きて行ける「生」へのベクトルを生じさせている。このように信仰を「救い」として用意することで、塗と母の道を分離したのである。運命のまま「死」を受け入れようとする塗はひっそりと人生を閉じることを示唆しているが、母はその信仰と寺を手伝うという生きがいのもと、その「生」を閉じることになるだろう。

③④の描写から、方方の描く「死」が従来と異なり、「死」を受け入れるための「過程」や、「死」に寄り添った描写となっていることが分かる。また「死」が影を落とさず、信仰という「救い」すら提示したのである。ここから方方作品から「死」の濃い影が薄らいできていることが分かる。それは、この作品集に続く形で発表された短編小説「雲淡風軽」（前掲）にも引き継がれている。

主人公慧明は最愛の息子小驢を事故で亡くした。その死には彼の友人胡大壮が深く関わっていて、胡が飛び込み台から息子を突き落とすことが原因であった。しかし慧明夫妻は息子と胡の仲の良さを理解していたので、胡を許そうとする。夫は海外出張で不在にしていたため、彼女は中学生の息子と二人暮らしの状態であった。息子の突然の死から、慧明を心配して、夫が数日、その後は妹が付き添ってくれたが、妹の生活を思い、彼女を家に帰した。一人になった慧明のところに、慧明が苦手を感じていた、向いに住む老婦人が鶏のスープを持って訪ねてくる。そこで老婦人は慧明にどうすれば犯人を許せるのかと問うのであった。彼女の孫は住宅街で車に撥ねられて死亡した。その死がきっかけで彼女の息子も帰らぬ人となった。嫁も辛さに耐えかねて、家を出てしまい、老婦人の幸せだった三世同居生活は崩壊した。孫の死は住宅内の無謀運転や違法駐車によるものであったが、住民も非協力的で警察もあてにならず、犯人も分からぬままであった。彼女は幸せな家庭を壊した犯人を憎んだ。しかし向いに住む慧明は息子の突然の死に打ちひしがれているにも関わらず、その死のきっかけとなった「犯人」を許した。慧明の話聞き、彼女に寄り添うことで、老婦人も徐々に孫と息子の死を受け入れ、そして犯人に対しても「許すこと」ができるようになってくるのである。

このように方方の描く「死」が変化していることが見受けられるのである。

3. 3 経済的成功

中国は社会の変化とくに経済的に豊かになったことで、生活様式に変化が生じている。方方作品でもそのような変化を反映しており、「グレイ・ユーモア」とも称されることもある筆致で、その変化を捉えて描いている。ただし変わることを悪いと言っているわけではなく、変化したことで生じた新たな問題やテーマを描き出している。

①では中国の社会変化を中心としてはいないが、上述したように文革を知る世代と知らない世代のジェネレーションギャップが描かれている。また魯昌南が変わってゆくなかで、妹の魯

昌玉は変わらない。そして前述したように魯昌玉の口から生活が変われば、人も変わるのも自然のことだと語らせる。だからこそ、「どのように変わるのか」が重要であるのだ。そこで魯兄弟に新旧を代表させつつ、魯昌南の変化について、李からは批判的に、妹からは受容的に描写をしているのである。

③では、社会の最下層で暮らす東亭の人々は金持ちや権力者の都合で生活が左右される様が描かれる。阿里の本質は変わらないが、彼もまた周囲の変化に日常を変化させざるを得ないのだ。そして金持ちのための道路建設に、東亭の人々の生活も影響を受けてしまう。しかしながら、放置され続けてきた彼らの生活に、手を差し伸べるのもまた金持ちという皮肉な現実を描いている。

④では、女性は結婚や付き合う男性によって、都市でも浮かばれる手段を持つが、男性にはそんな手段はないと、身も蓋もない状況を提示する。塗は自分と同じ境遇の女性と黄鶴楼にデートに出かけ、入場券80元を二人分払うことに躊躇してしまった。必死で貯めたお金を使う勇気が持てなかったことを後悔するも、その後すぐに彼女にはマイカーを持つ男友達ができしてしまう。また田舎出身のルームメイトも都市でコネを持つ女性を探すが、塗にはそんな女性とお近づきになる機会すらなかった。

また就職も都市部でコネのない塗はうまくいかないのだ。そこで大学院へ進む道が提示されるのだが、塗はそのチャンスも潰してしまう。③の阿東が大学院へ進学しても、納得のいく就職先を見つけることに苦労するように、都市出身者でもその家庭環境によっては塗のように就職一つとってもままならないのだ。それでも阿東は公務員になり、塗よりは浮かばれた生活を送ることができた。この阿東の就職という場面は、塗の就職に引き継がれ、より困難な状況が描写される。この点から阿東は塗自強のひな型的存在と言えるだろう。

また③でも描かれた道路建設が、当初は周辺の人たちに喜ばれるものの、実際には周辺に暮らす貧乏人のことは考えられていないという事実を指摘する。塗の両親は当初山村を通る高速道路が塗の帰省にとって便利になると喜ぶが、その道路建設のために先祖代々の墓を移転するよう命じられる。その移転命令に怒りを覚えながらも、墓を移転した結果、塗の父は倒れてしまう。しかも治療する費用も払えず、塗の父親はそのまま帰らぬ人になったのだ。

⑤では、「学位は買える」という皮肉な現実を描いている。ここでは、唯妙と唯肖を対比して描くことで、作品のなかでは終始金銭的な成功がよいのかを問いかけつつも、金銭的な豊かさを悪いものとしては描いていない。それと同時に、金銭だけでは解決できないものもあることも示唆してはいるのだが、それでもなお経済的成功者が得をするという状況を皮肉を持って描いているのである。

②では辛亥革命をテーマとしているため、これから社会が変わるといふ明るい未来を予感させる終わり方をしている。その先の未来にあるのが、その他の作品である。方方は文革を経てきた世代であるので、改革開放後の変化をずっと見つめてきたと言える。方方は変わることを

悪いとは言っているわけではない。ただ中国の変化が何をもたらしたのか、そして変化がもたらした悲劇を皮肉を持ってユーモラスに描き続けている。経済的に豊かになるにつれ、その発展から置いて行かれる人たちのなかには悲哀も悲劇もある。しかしそれを魯の妹は当然のことと受け止め、塗は「命（運命）」として受け入れる。そして禾の一家は雪青や唯肖以外は複雑な思いをしつつ、やはり受け入れてゆくのである。

4. おわりに

「万箭穿心」（『北京文學』2007年第5期）では客観視すると過酷な運命であっても、本人が「苦」としない女性像が提示され、「水在時間之下」（前掲、単行本は2008年に上海文藝出版社から出版）では歴史に翻弄された女性たちが漢劇の役者として成功してもなお「女」というジェンダーからは逃れることができない様が描かれた。しかしながら「出門尋死」（『人民文學』2004年第12期）以降の方方作品は「女性の過酷な運命」への描写が減少している。また近作では「塗自強的個人悲傷」に見られるように「救い」が用意されているなど、過酷なだけではない「何か」があり、また女性だけではなく男性にも社会の理不尽さはふりかかることがあることが示される。

これまで貧乏人は金持ちや権力者の論理に振り回されるという一方向の力学だったのに対し、「声音低回」では中国社会の変化にともない貧乏人を救うのもまた金持ちであり、権力者であるという、なんとも皮肉の効いた描写がなされるようになった。

2015年の作品である「雲淡風輕」では急激に増えた車の問題を、社会や人心の変化を象徴的に描くツールとしていたが、「民的1911」以降はとくにこのような中国社会の変化にともなった生活様式の変化が引き起こす問題などを取り上げる傾向が見られる。

しかし「刀鋒上的螞蟻」では若年層には文革そのものが分からないものになっているという事実や、世界から見た中国人の姿をカリカチュア的に描いている。

このように方方は中国社会の変化にともない作品の質を変化させつつも、「出門尋死」以前に色濃く漂っていた女性の運命の過酷さや「死」というテーマからは徐々に遠ざかりつつある。それでも「死」は作品にたびたび登場する。しかしながら「信仰」や救いが配されることで、従来の作品とは色合いを異にしている。

また「死」を受け入れるべきものとして、「死」を昇華することも試みられているように思われる。それは「雲淡風輕」で息子を死なせる原因となった息子の友人を許した主人公に、孫を死なせた犯人が分からないために行き場のない「恨み」を持ち続け、駐車場以外に停車している車を傷つけることで怒りを発散していた老婦人が「どうすれば許せるのか」と問いかけるシーンに象徴的に表れる。それでも「塗自強的個人悲傷」の塗の死が行き場のないものであり、多くの人には意味すら持たないのも事実である。

方方の描く作品には中国社会が抱える多くの問題が内包されている。方方は近作において、アイロニーを持ってそれらを抉り出しつつ、現代の中国社会で真面目に暮らす人々を客観的に俯瞰し描き出す。その目は社会の最下層に暮らす人々に注がれるだけでなく、方方の周囲の人たちにとっても「特別」であったはずの、本来最高学府としてあるべき大学にも向けられている。そこには方方の現在の大学に対するアイロニーが存分に込められているのである。

【付記】本研究は2015年度佛教大学海外研修の成果の一つをまとめたものである。

(せべ けいこ 中国学科)

2016年11月15日受理